

21世紀の日本のかたち（15）

--- 都心に大きな森をつくる - 東京の姿形について考える〈その2〉 ---



戸沼幸市
〈(財)日本開発構想研究所 理事長〉

1. 東京はコンクリート砂漠か

東京には緑が少ないかという点必ずしもそうではありません。たしかにNHKなどTVニュース番組のトップに流す東京の立体画像や東京都庁の展望室から見下ろす東京は、無機質な建物が地面を覆って、コンクリート砂漠のように見えます。

ここに1,000万人余の人間が密住し、日々多くのエネルギー（化石燃料）を消費し、間断なく二酸化炭素（CO₂）を排出しつづけています。

このコンクリート体質の巨大都市が築かれた江戸・東京の400年の歴史には、江戸の地震と火事、関東大地震災、戦災があり、これに備えて木質系の都市を不燃材料であるコンクリート系に改造してきた経緯があります。

しかしここに来て、地球温暖化問題が緊急の課題として浮上してきました。東京問題としていえば、コンクリート砂漠に酸欠が起こっており、より多くの緑を投入し、生態的リフォームが求められています。東京都心部に森といえるほどの大きな緑地、大きな森づくりが必要だと考えます。

2. 東京の森

東京の「大きな森づくり」の起点として、第一番目に、皇居の森が挙げられます。

植物生態学からみて「皇居」を森とみるかとい

えば、その中間、林と森の中間といったところでしょう。皇居の場合は、実態以上に江戸の中心、濠（水）に囲まれた徳川幕府の場所を、4代の天皇の居所として日本国家の象徴空間、日本の自然につながる木々に囲まれた天皇の森として、大きな意味を持っています。さらに皇居の森について皇居前広場、日比谷公園、皇居東御苑、北の丸公園は、東京都心部の森の資源として貴重な緑地に違いありません。この空間は21世紀の日本のアイデンティティーを現わす世界遺産です。

東京都心部に現存するいろいろな緑地の中で、名実ともに森として挙げるとすれば、まず神宮の森（内苑）でしょう。この森は1920（大正9）年、明治天皇、昭憲皇太后の霊を祀る明治神宮の営造に合わせてつくられ、育てられた人工の森です。全国からの献木17万本（365種）を植林して、生態的遷移を巧みに読み込んで、森にまで育てた日本の造園学の大きな成果です。代々木の気候・風土に合わなかったため、今では246種に減ってものの、針葉樹、常緑樹、落葉樹の大木群が、まさに東京都心にあって100年の森になっています。

明治神宮内苑の森について、代々木公園、明治神宮外苑、赤坂御所は一つながりの都心の大き

な緑地となっています。

新宿御苑もJR山手線の内側にある森的庭園です。この緑地空間は江戸開府以来の大名、信州高遠藩主内藤家の広大な下屋敷を明治政府が日本式庭園に加えて西洋風宮廷庭園としたもので、東京都心の有力な森的空間です。

東京都心部の緑地、公園・庭園は、江戸時代の緑のインフラ、大名屋敷を活用したものが多くありますが、東京都が緑地景観形成特別地区の庭園として次のものを挙げています。

浜離宮恩賜庭園（徳川家斉の大名庭園）、旧芝離宮恩賜庭園（老中久保忠朝の邸地）、小石川後楽園（水戸徳川家の中屋敷）、清澄庭園（江戸の豪商紀伊国屋文左衛門の屋敷跡）、六義園、旧岩崎邸庭園、向島百花園、旧安田庭園、旧古河庭園、殿ヶ谷庭園などがあります。

東京都はこれらに新宿御苑を加えて、文化財庭園として保全する施策をとり、周辺の建築に対して高さ制限、看板規制を行っているのは好ましいことです。

さらに都心部の大きな緑地空間として、上野恩賜公園（1873（明治6）年1月15日太政官布達第16号により浅草、芝、深川、飛鳥山などととも日本最初の公園に指定された）があり、ここには動物園もあって、都民、市民はもとより、広く多くの人々に親しまれている公園です。そして美術館、音楽堂、博物館が点在し、まさに芸術の森です。

3. 鎮守の森

江戸から続く東京は、寺と神社がまことに多い都市です。人間はマン・イズ・モータル（人間とは死ぬ存在）である以上、洋の東西を問わず、墓のない都市はありません。日本の場合、多く仏教式であり、寺が死者をまつります。都内には増上寺、築地本願寺、泉岳寺、太宗寺、護国寺、寛永

寺、浅草寺と名だたる寺があり、寺町ができています。

日本の宗教空間は、砂漠のイスラム教式や、西欧キリスト教式と異なって、お釈迦様の雰囲気もあって、寺の境内に樹木は欠かせません。東京の寺院は、土地バブル期に庭をつぶしてアスファルトの駐車場にしたりしましたが、それでも樹木は寺々を覆っています。大寺院ではないけれど木々に囲まれた小さな寺が東京都心に数多く存在し、雰囲気をもったまちの小さな緑地です。

寺院とおもに、神社の境内はほとんどが大きな樹林に覆われています。その代表格が明治神宮の森ですが、日本の神は自然そのものといってもよく、まちばの祭を主催する神域は樹々と切り離すことができません。神社は森の中に在るというイメージで、この宗教空間は設計されています。まちの人々の安全・安心、幸運を守る「鎮守の森」が都市の到るところにあるわけです。都市生態論的にいえば、都市の要所要所に、結果的にしろ、緑地を保全するという古来からの大きな知恵が含まれているということができましよう。

4. 森をエコロジカルコリドールでつなぐ—東京都心の大きな森計画

東京都心部（23区）には大小無数の緑地、公園、庭園、森が保全されています。しかしこれを全体として俯瞰すると、コンクリート砂漠に見えるのは、緑地が自動車道路などで分断されて、きれぎれになっているからなのです。公園や森をつないでいるこれら主要な道路を無電柱化し、緑道化することができれば、視覚的に森がつながり、森イメージが大きく膨らむことでしょう。

例えば、「皇居や赤坂御用地、神宮外苑、青山霊園、新宿御苑、明治神宮、代々木公園などの都心のシンボリックな大規模な緑と、これらを結ぶ外堀通り、山手通りなどの幹線道路の街路樹、開発に

伴い整備される緑地などを連続させ、都心部を環状及び放射状に貫く骨格的な緑の軸を形成していく」という「東京都景観計画」(※1)をぜひ実現して欲しいものです。

さらに、範囲を広げて、全体として網の目状に緑化された道“エコロジカルコリドール”生態回廊でつなぎ合わせるができないかというのが、21世紀の東京都心の大きな森計画のポイントです。

東京大学名誉教授(造園学)の井手久登さんも「東京セントラルパーク構想について」(※2)で、私と同様の考え方を述べておられます。欧米の首都、主都のセントラルパークに匹敵する東京の中心部にある大小のパーク(400ha)を、エコロジカルコリドールでつなぐというアイデアです。



東京都景観計画の中に景観基本軸として規定されている隅田川景観基本軸、神田川景観基本軸、玉川上水景観基本軸という川筋“水の道”があり、これらは魚が泳ぎ、鳥がやってくる大きなエコロジカルコリドールです。

そしてさらに、起伏に富む東京の市街地を走る崖線が緑の道としてエコロジカルに大きな役目を果たしています。武蔵野台地の東端と海岸との接線につくられた江戸・東京は、斜面地、崖線を巧みに活用してつくられています、斜面地は視覚

的に緑を多く感じさせます。多くの神社や寺院はこれを巧みに活用してつくられているのです。

王子から谷中、東京駅、新橋、品川の崖線、皇居北側から外濠に沿った崖線の斜面緑地はできるだけ緑化して緑の道としてほしいものです。

そして東京都全体としては、国分寺崖線が東西に軸状に走っており、文字通り、丘陵部と都心をつなぐ生態回廊です。

このエコロジカルコリドールを通して「とかく西欧に比べて植物的空間といわれる都心部の公園緑地について、動物を含めた生物多様性を高めるパークシステムが必要である」という井手さんの説に私も大賛成です。

21世紀、都市の緑化、森化が実現すべき当面の課題となってきたと感じます。都市気候制御、環境保全の観点から風の道、水の道などの提案も多くみられます。

私自身、30年来、「東京都心、JR山手線内」に大きな森をつくることを夢想してきましたが(早大21世紀の日本研究会'70提案)、21世紀に入って、地球温暖化問題、環境問題に直面し、ようやく20世紀型の機械文明から環境文明への転換期に入ったと感じます。

私どもの提案する21世紀の東京都心の大きな森計画は、そのシンボルプロジェクトになると考えます。

※1「東京都景観計画」東京都 2008年

※2「東京セントラルパーク構想について」井手久登
『21世紀の日本のかたち 生命の網目社会をはぐくむ』戸沼幸市編著 彰国社 2004年

(2009年03月15日)

エコロジカルコリドールでつなぐ
「東京都心の大きな森計画」の提案

